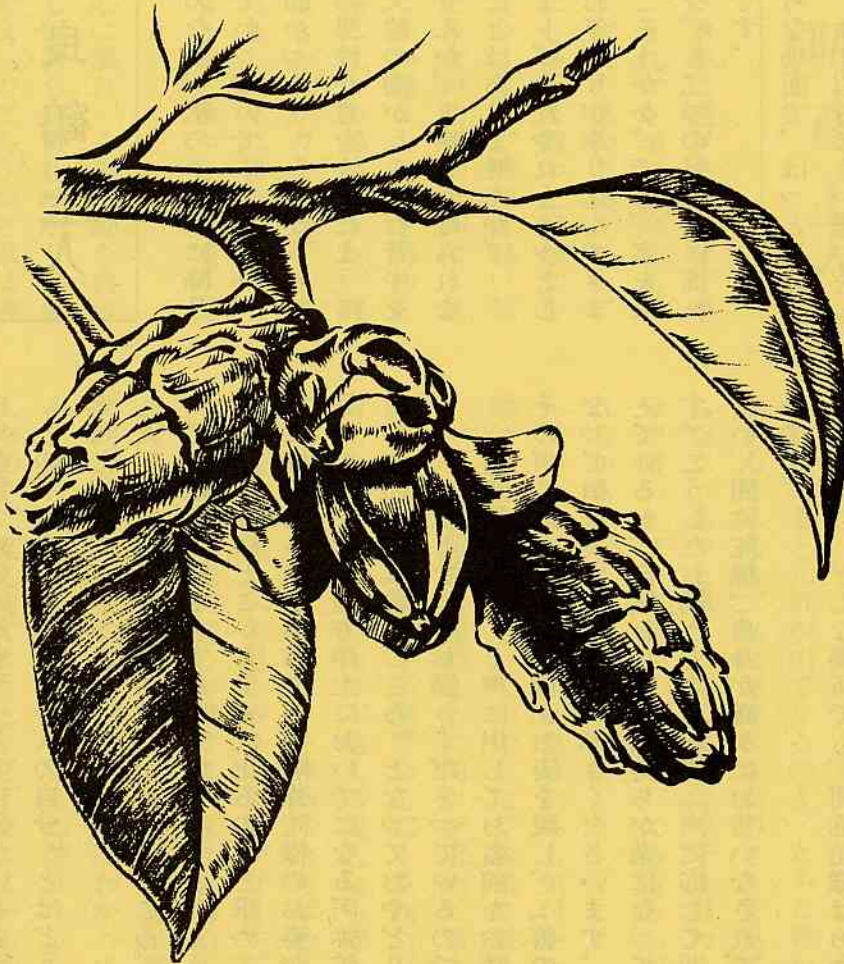


みおしえ



助け合い
支え合う
心

ツブラジイの実

—— 埼玉教区浄土宗青年会 ——

こころにやどる阿弥陀様

円福寺 池田良鶴上人

夕方から降り出した激しい雨のなか、駅のホームに降り立つと改札口は傘を持たない人でいっぱいです。「ああ、私は傘を持っていてよかった。助かった！」と何かうれしい気分していると、前にいた一人の男性が意を決したように雨のなかへと歩き出しました。大粒の雨がしみ込む背中を見ながら、「傘に入っていきませんか。」と声をかけられなかった自分に悔しい思いをしたことはありませんか。

さあ、やっと座れた電車のシート。やれやれとホツとしていると入口のドアが開いて、お年寄りが乗り込んできました。「たぬき寝入りでやり過ぎそうかな。でも、席を譲ればお年寄りは楽になるだろうな。」と二つの気持ちに揺れたようなことがきつとあるはずですよ。

私たちは毎日の生活のいろいろな場面で、はっと自分の言動を思い直すことがあります。まず自分はよい思いをしたいと願う一方で、他人を思いやる気持ちも必ず生まれます。例えば、怒りにまかせて暴言をはいた後で、「何ということをしてしまったのか」と深く後悔したり、或い

は「このままではいけない、だめになる」と自分を踏み止まらせ変えていこうとしたり、まるで私たちの心には自分自身を見つめているもう一人の自分がいるようですよ。

この、私の中の「もう一人の自分」とはどういうものなのでしょう。

人として、よりよく生きたいと願うところ。私の内にあつて私以上の働きをする「人の良心」といえるもの。いたい、これはどこから生まれ出るのかと求めていくと、そこには私たちのご本尊である阿弥陀様のお姿がはつきりと見えてきます。西方浄土においてになる阿弥陀様が、私たちの心の内に『善のこころ』となつておやどりになり、もう一人の私となつてお働きくださっているのです。

『南無阿弥陀仏』と声に出してお名前をお呼びすると、その声に應えて阿弥陀様がお姿を現し、『善のこころ』となつて煩惱多い私たちをお導きくださいます。お念仏を称えていると、自然と身体や気持ちがお楽になつてくるはずですよ。こうしたお働きを応声即現おうしやくげん（声に應じて即ち現す）と言ひ、阿弥陀様ご自身が確かにお誓いなされていることなのです。

いつでも、どんな場所でも、阿弥陀様はお念仏する私たちと共においでくださいます。毎日の生活の折々に阿弥陀様を想ひ、阿弥陀様へお呼びかけしながら『善のこころ』を育てていただき、毎日を過ごしてまいりましょう。

支え合う心

常福寺 渡邊昭彦 上人

当山に詠唱講が発足してまだ一年半に過ぎませんが、講員さんは皆とても熱心ですし、それにも増して楽しんでくださってる様子が、何よりありがたく思っていました。

ところが、今後の詠唱の参考にと書いて戴いた感想文を読んだり、直接話を伺ったりしていますと、最初は軽い気持ちで、他で聞いて感動して、亡き夫の供養のために、老いた自分に賭けをするつもりで、等の様々な動機で始められた方々が、どういう訳か皆同様に「いつ辞めようか、辞めまいか」と、迷い悩んでいたことがわかりました。それでも各自がその葛藤と戦いながらも、徐々に自信をつけてこられ、今では詠唱が生きがいだとさえおっしゃってくださる方もおります。

それにしても、阿弥陀様の御心に触れ、その感動を自分の心の糧とすべき詠唱が、今後も気持ちの負担ばかり必要なのだとしたら、はたしてそれで良いのだろうかと私は考えざるを得ませんでした。同時に、講員さん方をここまで支え、あまつさえ明るく楽しい集まりにしているものは、

いったい何なのか不思議でなりませんでした。

その日もいつもの練習が終わり、私は講員さん方がお茶を飲みながらおしゃべりしているのを何の気なしに聞いていました。するとAさんが「私はBさんのいつも明るい顔を見てみると元気が出てくるのよ。」とふと言われたのです。Bさんは「あら、私は逆にCさんのことを見ていると頑張らなくっちゃと思うの。」「Cさんは」そう言われても私は自分が暗いとはかり思っていたの、でも皆さんが良くしてくれるから…。」

驚いたことに、お互いが自分たちも気付かないうちに、助け合い支え合っていたのでした。詠唱に限らず、仏の教える方々は皆、ご主人や子供さんを亡くされたり、ご病気の方のお世話をしていたり、他人に言えない様々な事情の中で、本当の切なさや淋しさを味わった方ばかりです。でもその体験は他人への思いやりにつながります。その人はちゃんと阿弥陀様の御心が戴けて、それを隣の人にも分けてあげることが出来るでしょう。たとえ自覚は無くとも、人間同志は気付かなくても、阿弥陀様はわかっているらしい、明るく楽しい仲の良い、生きていくのがうれしくなるような人の和を、支え育てようとして下さっているのに違いありません。

数珠（じゆず）

ご法事や仏様にお参りの際に手にするもので、日頃親しいものです。珠数、誦数、呪珠と書くこともあり、念珠（ねんじゆ）とも言います。珠（たま）の数は108を基本として、その10倍の1080や半分の54、4分の1の27などの百八の煩悩を絶つ意味から来ることで知られていますが、数の定義はその長さや材質と共に様々です。

浄土宗では一般的に日課念珠という二連の数珠が用いられ、お念仏の数が数えられるようになっていきます。これは法然上人の弟子の阿波の介の工夫によるとされています。

因みに平泉中尊寺の金色堂の入口のすぐ脇に阿波の介のお墓があり、お参りした方もいらっしゃることでしょう。

この他に百万遍数珠とってとても大きな珠の数珠もあり、大勢の人が輪になってお念仏を称えながら繰っていきます。

法然上人はある人の問いに答えて、お念仏は必ずしも数を必要とするものではなく、常に念仏を申すことが大事であると示されました。お念仏を称えやすくするために数珠はあるのです。

【編集後記】

◆今回は、渡邊・池田両上人の登場である。共に中堅として活躍しているお二人には、自らの体験の中から見つけた貴重な話を頂いた。改めて感謝申し上げたい。

◆表紙絵のツブラジイは円ら椎と書き、一般に椎とか椎の木などと呼ばれている種類の一つであり、その実とはどんぐりである。今まで何気なくどんぐりを見ていたが正式名称は知らなかった。普段気付かずに見過ごしてしまうことは多いが、人との関係や仏様との関係も同じことである。忘れずにいたいものだ。

二三六五

埼玉県鴻巣市本町八の二の三二

勝願寺内

『みおしえ』編集室 代表 藤田俊彦